

イースターおめでとうございます
主にある教会の兄弟姉妹の皆さまへ

2015年3月29日（受難週） 沖縄キリスト教協議会

「辺野古新基地建設は絶対に阻止されねばならない」

主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。（イザヤ書2章4、5節）

始めに

沖縄は、古来、琉球王国時代を含むおよそ1000年の歩みの中で、その独自の文化や言語を発展させながら、他国との友好を築き、「万国津梁の精神」¹を重んずる歴史を育んできました。また、「命どう宝」（ぬちどうたから：命こそ宝）という言葉が琉球・沖縄の歴史から生まれたことは、いかにこの土地がいのちの尊厳を重んじてきたかを現しているといえます。その一つの象徴が沖縄戦で亡くなった24万余の名前を記した平和の礎（沖縄平和祈念公園内）に見ることができます。そこに刻まれた名前は国籍を問わずに記されており、これは世界に類例を見ない特徴であり、いかに沖縄がいのちを尊ぶ普遍的な精神を表明し、平和を希求しているかが伺えます。その沖縄の歴史、文化、思想がある中で、現状は、戦後70年を迎える今尚、米軍事占領が続いているかのように軍事基地から派生する事件・事故が繰り返され、オスプレイ強行配備、基地の強化、新基地建設の強行がされています。日米安全保障制度のゆえに、近隣諸国に対する「抑止力」を理由に軍事基地が強要され、その代償として沖縄の人々のいのちが脅かされ、人権が軽視され続け、今や犯罪的な「犠牲」を強要されています。

歴史から見る

沖縄に置かれた米軍基地は、日本国土の0.6%にしかみたくない沖縄島に74%もあります（島の約2割を占める）。それは初めから置かれたものではないのです。1952年、日本は米国との間にサンフランシスコ講和条約を結び、日本は米国支配から抜け出し、主権を回復して行きました。しかし沖縄は、本土と切り離され、米軍の直接統治下に置かれます。日本本土では、主権回復に伴い在日米軍基地に対して住民の反基地闘争が激化し、米軍はそこを出て行かざるを得ない状況に追い込まれて行きます。そこで岐阜県（キャンプ岐阜）、山梨県（北富士演習場）などから米軍統治下にされている沖縄に移設されて行きます。ちなみに普天間基地（米軍普天間飛行場）は、1945年6月の沖縄戦の最中に現在の場所に滑走路が造られ、本土決戦の軍事基地として造られて行きました。しかし本土決戦になる前に日本の敗戦が決まり普天間基地はしばらく放置されます。収容所から帰ってきた宜野湾村²の人々は、当然、自分の土地に帰っていくわけですが、しかし自分らの土地が滑走路となり、仕方なくその周辺に生活を余儀なくされます。ただ50年代に入ると朝鮮戦争が始まり、普天間基地が整備され、拡張されて行きます。「銃剣とブルドーザー」と言われる強制接収により、多くの住民が土地を奪われて行きます。その他、伊佐浜、那覇市銘苅、安謝、天久、小禄村具志、伊江島の真謝などで接収されました。米軍は「ハーグ陸戦法規」に基づいているとして合法性を主張します。しかし実態は、銃剣とブルドーザーで脅迫、強奪以外の何ものでもありません。土地の賃借契約には、1坪の年間借地は「コーラ1本代にもならない」もの

¹ 東アジアの南海に浮かぶ小さな王国が、武力支配が中心となる15世紀以降の世界で、その地域的特性を最大限に活かし、物資の貿易、文化芸能などの交流により、東アジアを中心に平和的共存共栄の世界を実現しようとした。

² 現在は宜野湾市で普天間基地が市内のど真ん中に置かれたドーナツ状の形をしている。

でした。また、強制接収により、多くの住民が土地を失ったことから、琉球政府は南米などへの移民を働きかけています。沖縄の住民が米軍基地拡張のため故郷から追い出されたということです。

辺野古の米軍キャンプ・シュワブ基地沿岸部海上埋め立て建設の実態

普天間基地から「移設」という形で、辺野古の米軍キャンプ・シュワブ基地沿岸部の一部海上を埋め立てて基地を造ろうとしています。これは単なる「移設」ではなく、老朽化した普天間基地を最新基地に造り変える新基地建設ということです。大浦湾に隣接する新基地建設は、原子力潜水艦や大型戦艦も横付可能な陸空海の戦略的機能満載の基地が造られて行きます。実はこの計画は、ベトナム戦争中の1960年代にまったく同じ辺野古岬の位置に滑走路を造る計画がありました。しかし長期化する戦争において、米軍の予算の膨張により実行されなかったのです。現在、仕方なく辺野古の場所しかないかのように選択されていますが、この普天間基地移設問題というのは、日米両政府の思惑通りに事が進んでいると言わざるを得ません。それも日本国民の税金 1 兆円を超える金額がつき込まれようとしています。米国にとっては今を逃したくないということでしょう。では、日本政府にとってのメリットは何か？それは日米安保の維持が、沖縄に基地を押し付けることで成り立つということです。軍事基地があればその周辺に様々な被害がもたらされることは決まっています。それが沖縄だけに集中させておけば、基地問題が沖縄の問題になっても、日本国民の問題になっていかないということです。日米安保による日本側の負担は、その多くが沖縄の犠牲において成り立っているのです。

終わりに

辺野古に造られようとしているこの新基地は、近隣諸国にとって当然、脅威となる威嚇の何物でもありません。もし私たちがそれを容認³ してしまったら、どうして隣国アジアの方々と友好の握手を求めることが出来るでしょうか。沖縄は、またしても加害者にされてしまいます。ベトナム戦争当時、沖縄から沢山の医薬品をベトナムに届けたことがありました。当然、お礼の言葉を頂きましたが、それと同時にベトナムの方から「何故、沖縄の人々は米軍基地から飛び立つB52（大型爆撃機）を止めてくれないのですか」という言葉を投げかけられたと言います。ベトナムから見れば、沖縄は「悪魔の島」として見えていたのです。沖縄が加害者と気づかされた出来事でした。沖縄の人々には、今尚、「万国津梁の精神」の思いが魂の奥深くに息づくものです。日米両政府が隣国に対する「抑止力」として軍備を強化し続けるたびに、沖縄の心はないがしろにされ続けています。

軍事基地は「抑止力」のために必要という声があります。「抑止力」＝「基地」ということなのでしょう。しかし、この世界において武力による平和は、結局、悲しい結末を迎えることを歴史は証明しています。イザヤ書の言葉は、まさに戦争の虚しさを教えているのであり、「剣・槍」（武器）は、“いのち”を破壊するもの、「鋤・鎌」（農具）は“いのち”を生み出すものということです。命を破壊する剣や槍を打ち直して、命を生み出す鋤や鎌に打ち直しなさいと聖書は教えています。そして本当の「抑止力」は、“いのち”を豊かに育む食を生み出すことから始まり、更に“いのち”を育む友を築くこと、すなわち「抑止力」＝「友」ということになります。世界中で食を分かち合い、友人ができれば争うことは無くなるのです。教会はまさに、世界中に友を築く「万国津梁」の働きが担われており、「戦うことを学ばない」という聖書の言葉の実践者とならなければならないものではないでしょうか。先ずは今、私たちは沖縄の名護市辺野古に造られようとしている新基地建設を絶対に阻止しなければなりません。敬愛します諸教会の皆様が祈りが立ち上がる事へと繋がることを信じます。キリストの復活に希望を受けて。

³ 心の内では反対であっても、黙っていたら、行動に移さなければ容認の枠に押し込まれてしまうものです。